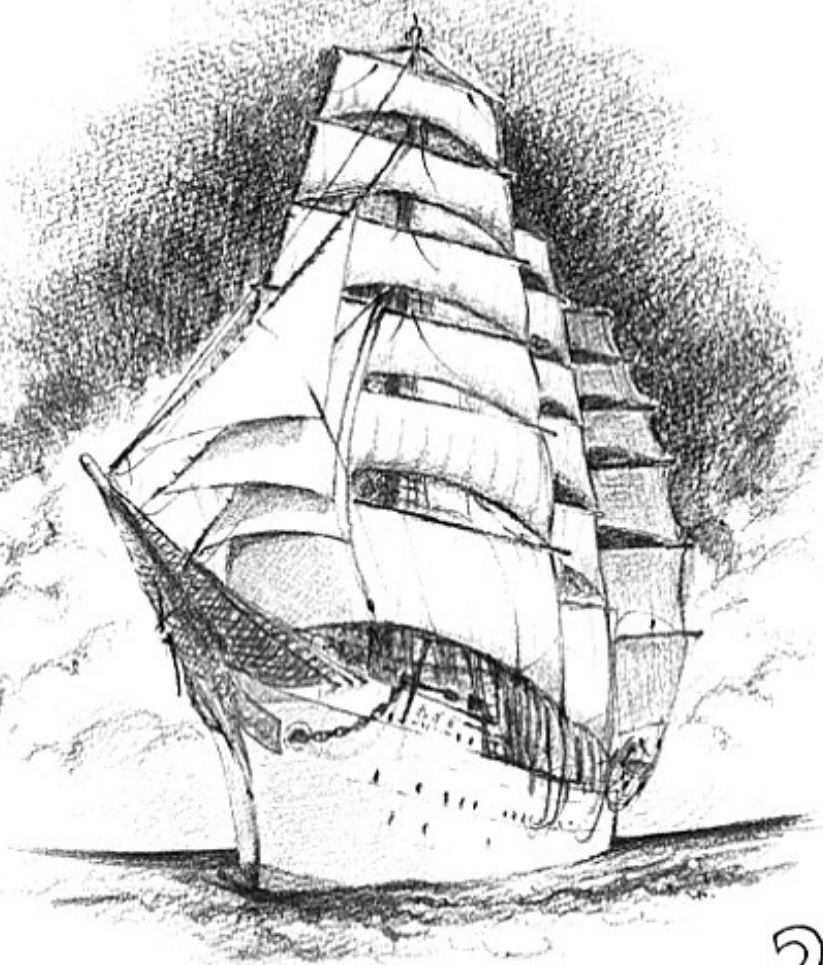


平成28年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第56巻3月号(通巻680号)

風土



3

亀鳴いて

神蔵

器

水音の奥へ奥へと探梅す

石ころのみな賢くてクロツカス

正夢の夢入れ替り冴返る

霜柱三寸のびて歓喜なす

雛飾る流人の裔の墓守りて

彩茶庵ぶつきらぼうに亀鳴いて
薄氷の消ゆる筋目の亡母のこゑ
ことだまのさきはふ国ぞ山笑ふ
田の中に巖一つあり牛鋤けり
一匙のロイヤルゼリー涅槃西風
三極の万の花房雨滴こらふ
ポストまで二百歩春の月育つ



竹間集

同人作品



クリスマス

浅田 光代

冬晴や木樽の箍を締め直す
冬麗のひとつとばしに坐る椅子
鴨啼いて近江の水のあたらしき
風船を振ぢれば兎クリスマス
撫牛もテント掛けなる年の市
取り置きを根方に重ね飾売る
大根を使い切つたる夜の星

ブローチ

柿沼 盟子

降り積みて降り積みてなほ積む木の葉
雪吊りの縄の遊びや空青く
冬もみぢ茶室へ三つ門潜り
ブローチはクリスマスツリー出勤す
集荷場まだかまびすし冬の月
年の瀬の上野に始む街歩き
九条葱包むや葉先折れぬやう

山眠る

高村 令子

まだ残る菊の色香を括りけり
語れざる記憶は消えず木守柿
冬蝶や想定外の里日和
山眠る虹の褥を引き寄せて
長生きは耐へることかも寒椿
まだ賀状書ける幸せ米寿来る
初風は地球の息吹き茜さす

初 曆

土井 三乙

店頭に秋刀魚の光る裏通り
非通知の電話の来たる冬の暮
省略か凝縮か野の一冬木
遠く冬木電話の声に覚えあり
煤逃の帰る頃合計りをり
包丁の背で肉叩く年の暮
まだ何も書き込みのなき初曆

寒夕焼

根岸 善行

胸沈め肩まで沈め柚子湯かな
数へ日や重たきものを買ひ足しぬ
覗き穴覗いてみれば歳の暮
寒夕焼狭めて色を尽くしけり
小松菜の虫の穴より空覗く
映画見て泣き北風に泣きにけり
水仙や沖の巖の波しづき

冬 銀河

林 いづみ

檣櫓の実「お持ち下さい」青柳寺
冬ざるる庭に開きし花鳥の間
水昏れて地にぬくみあり浮寝鳥
冬紅葉映して雨の石畳
葱育つ錨星よりしづくして
生も届出は死も紙一枚や冬銀河
置炬燵名簿に残る故人の名

一行詩

小林 共代

城山に二体の神や初茜
流されて己失ふ浮寝鳥
これやこの奈良の郡の紅葉鍋
十二月気持ばかりが先走り
一行詩心の糧に去年今年
六尺の影を曳き摺る大枯野
菊焚いて菊の匂ひの残りをり

竹間集作家特別作品

放鷹会

小林 共代

御慶かな三百年の松拜す
放鷹会江戸の歴史を今にして
鷹匠の鳥打帽や淑気満つ
鷹匠の振替に拳固くして
大空へ羽音鋭く鷹の翔つ
汐入の池の賑はひ鴨の陣
横町に添うて汐の香初稻荷
冬空に尖塔光る本願寺

駈けて来て散華を受くる冬帽子
冬紅葉九條武子の碑の肩に
病院の花舗の賑はひ降誕祭
衆満ちて病院室のクリスマス
聖夜の灯展望回廊包みを取り
筆になる渡るの由来風花す
年うつる一の鳥居は工事中
数へ日や暖簾の古き佃屋
観音の祀らる路地や冬茜
両岸にひとしく遠き鳩
冬ざるる空より水の蒼さかな
街騒をとほく辛夷の冬芽立つ

山河集

同人作品



神蔵
器選

昼の黙夜の饒舌枇杷の花 豎山道助

霜柱昭和を語る陛下かな
生きて今白山茶花の下にあり
年の夜のひとりの席の機内食
何もかも見ゆる齡や冬銀河

鈴木庸子

ぼろ市を抜け来て白洲跡に佇つ
竜の玉大灯籠に葵紋
クリーム of 瓶の指あと去年今年
一つ押す訂正印や十二月
タイマーに振りまはされし年の暮

雨宮桂子

水仙の百万本の振り向ける
極月の靴音ひとつ無言館
冬蝶や未完の塔にひとり来て

冬の月長き廊下を折り返す
枯蓮や抱きてもいだきても寂し

吉水すみれ

真つ直ぐに天城山より時雨来る
踏みへりし磴百段や笹子なく
大根干す日射し短き山の里
道問ひし人も旅人暮早し
何時からを晩年といふ寒夕焼

落合絹代

働く手洗ふ勤労感謝の日
江ノ電のどこで降りても冬の海
枯園や傾ぐ蘇鉄のわらぼつち
母子像にくれなゐ映ゆる冬薔薇
ちぎり絵の一句愛しも古曆

旧前田本家

銀杏ちる侯爵邸の会議室
小春日や林の中の薬医門
冬薔薇や文豪の名のモカ珈琲
初氷ポストに本の届く音
毛糸編むひとさし指で糸を繰り

一村の早眠りをり冬の星
げんまんの小指の細し冬つばき
家元の格子戸艶に事始め
師走かなメモひとつ消し二つ足す
冬夕焼みんな真つ赤に鬼ごっこ

初御空廻る地球に生かされて
あらたまの未知の余生に踏み出さん
厨ふと嫁と二人で初笑ひ
阿修羅像冬の奈良坂築地みち
江の島の時化の海鳴り遠くまで

江戸川の渡し賑やか浮寝鳥
綿虫舞ふ安曇野碌山美術館

中嶋 陽子

渡辺 やや

榎野あさ子

遠藤道遙子

大学祭を締める大根踊かな
山茶花やまた訪ねたき詩仙堂
動くもの見えず箱根の枯芒

焼芋を割つて幸せ色に会ふ
母の卒塔婆立てて奇しくも漱石忌
この街にいよいよ初雪来りけり
マナーモードに着信多き十二月
門出でてすぐに躓く十二月

命名書書くを頼まる冬蒲公英
あえかなる赤子の手形冬ぬくし
今は無き駅名なりひら返り花
コンサート舞台の左右に聖樹置く
誘ひ合ひ一人居同士年越そば

息白く少女の背負ふヴァイオリン
七十路へ一步踏み出す十二月
山茶花を行きに帰りに見て過ぐる
冬眠の古典大系書棚かな
刻止むるぼんぼん時計漱石忌

土井ゆう子

仙田 孝子

上村 萼子

◇特別作品◇

湘南秋冬

中嶋 陽子

秋燕や「海岸回り」のバスに揺れ
爽やかや満帆の船つらなりて
鳥渡るヨットに報道局のロゴ
大鷲のモデルウォーク秋うらら
秋の日に浮いて蜘蛛の巣大いなり
鼻高き裕次郎像秋夕焼け
うどん屋ののれん片寄る秋の暮
カヤツクの水脈ひとすぢに冬立ちぬ

釣り具屋にサンダル五色小春風
紅葉散る塀を伝ひて海に出づ
巖の名は亀の子島や波の花
荒波のあとのさざ波冬かもめ
鎌倉の野菜づくしやクリスマス
ヤマトタケル佇みし井戸雪蛭
寒椿中の一花の真顔なる
我が影にすつぽり冬たんぽぽ二輪
綿虫と山ふところの工房へ
手びねりのろくろを回す聖夜かな
冬の月高台薄く削り出す
霜の夜の茶碗に記すイニシャル

風土集



神蔵 器選

敗荷や昔一億総懺悔 川崎 豎山道助

冬の虹ラテンの語尾は消え易く

口髭に明治の匂ふ漱石忌

短日や嫁は厨を丸く拭く

藁布団置くりマ移民史料館

初雀俳諧道場まで一步

水仙に顔押しあてて別れけり

極月の寺に震へる塔ひとつ

たんぽぽの絮冬日の中にひとり

冬満月君と仰ぎし刻思ふ

綿虫に逆光といふ日ざしかな

山門に寺の由来や竜の玉

やりとりの庭師の親子小春かな

生真面目に一輪咲きし冬の薔薇

郵便受けにメモある名刺師走かな

川崎

鈴木庸子

福生

兩宮桂子

白鳥の点となる迄見送れり いわき

冬天へ弾く大樹の檀の実

短日や百周年の無人駅

一湾を磨きあげたる冬怒濤

気に入りの箸選びをり年の内

シャンパンの栓のはじけてクリスマス

玄関の長き靴べら去年今年

立てて干す磨き丸太や冬霞

捨てられぬ空箱幾つ枇杷の花

年の夜を鬼の舞ふなり延暦寺

寒月や電子メールの受験票

合評の編集長の炬燵かな

樹にビルにリボンを掛けてクリスマス

日課なる母への電話葱刻む

冬帽子目深に降りる海の駅

東京

中嶋陽子

東京

奥田茶々

佐藤やすこ

行く年や天上界へ原節子 さいたま 須藤美智子

父と子の影絵遊びの障子かな
寒柝の青年団に孫達も

落葉道淋しきときは音立てて
鍋料理夫の出番や鍋奉行

運び込む加賀雪吊りの縄の束
整然と冬空に撤く縄百本

職人は無口に苑の冬支度
数へ日や差し出す文をまた忘れ

一湾を越えて裾まで雪の富士
額に入れ飾る絵手紙去年今年

ト口箱の道へはみ出す年の市
湯気立つや鍼灸院の人体図

開演を知らせるチャイム春シヨール
風花や父の遺せし二眼レフ

木枯や時々動く猫の耳
モネを観に妻外出や雪蛭

俳友に肩叩かれて冬暖
冬至の日膝に来てゐるサンルーム

誰が置きし句座の机に烏瓜
髭を剃る鏡の中に歳暮れぬ

空を抱く銀杏大樹の冬支度

千葉 上村 葉子

松山 瀬戸 薫

川崎 遠藤道遙子

京都 杉本葉子

雑踏に目が合ふ人も聖夜かな
凍り付く雨戸開ければ富士の峰

びつしりとくろがねもちの実がなりぬ
後ろ姿障子を抜けてゆきにけり

八十の噺や噂などはなし
あれこれと手抜きなれども年の暮

数へ日や病院二軒夫婦して
冬の夜やノンアルコールとは侘し

霧動く檜林に冬の日矢
干されたる布団に猫の深眠り

挟間田の日暮れを急ぐ雪蛭
歳晩や昼を灯せる電器店

大年の蕎麦屋の湯気に葱匂ふ
数へ日を歩いて鴨に会ひに行く

処方薬受け電飾の冬の町
一輪車覆ひつくして大根積む

真向ひに山の日巡る掛大根
ことごとく雲は茜に年暮るる

慎みて感賞したる年の内
冴ゆる夜のそろそろ月と語る頃

春隣イサム・ノグチのこけし達

佐倉 松崎 雨休

津山 生田 作

津山 生田恵美子

横浜 安永 圭子

鎌倉近代美術開館